

一般質問

高齢者の孤独・孤立を防ぐ仕組み 地域公共交通の再編と移動環境

会派：希望の扉 広沢 修司



共通する視点

表面化してから対応するだけでなく、
「前の段階」で気づき、つなぐ。

1 相談前の変化に気づく

2 外出・社会参加・
移動を支える

3 小さく試して
改善する

焦点: 既存の取組を否定するのではなく、補完し、実行段階に進めるための確認

高齢者福祉：把握しにくい孤立をどう支援につなぐか

65歳以上
単身世帯

1,702 → 2,234
2015年 2020年

把握が難しいと想定される方

- 1 近隣との交流が少ない一人暮らし
- 2 退職・死別で社会との接点が減った方
- 3 支援が必要でも自ら相談につながらない方
- 4 家族がいても家庭内で孤立している方

早期把握



情報整理



必要性判断



支援・活動へ接続

論点：「誰のどのような変化に気づき、どう支援につなげるか」を具体化できるか

外部資源・小規模検証

本人同意・
個人情報保護

技術だけに
依存しない

既存支援を
補完する

小規模検証で見る判断軸

- 地域課題の解決に資するか
- 関係機関の業務負担軽減につながるか
- 支援の質の向上につながるか
- 費用対効果と運用の継続性を確保できるか

導入ありきではなく、条件を整理して「小さく試す」ことが論点

地域公共交通:「近くにある」から「使える」へ



でも

生活場面で 本当に使えるか

通院

買い物

通勤・通学

公共施設

地域活動

民営路線バス

広域・幹線

コミュニティバス

市内拠点を結ぶ

オンデマンド交通

空白地の日中移動

地域共助型交通

地域固有の課題

タクシー・シェア

個別・柔軟な移動

確認したいこと:制度名ではなく、市民が「自分の目的地へ行く方法」を分かるようにできるか

結論：暮らしから逆算した制度設計へ

1

相談前・利用前の
見えにくい困りごと
を拾う

2

小規模に試し
データで改善する

3

制度名ではなく
市民の目的から案内
する

高齢者福祉も公共交通も
「制度があるか」ではなく「暮らしに届いているか」を確認する

令和8年度は両計画の実行段階の初年度。早い段階で検証と改善の仕組みを整える必要があります。